

説明会開催日：2026年5月18日

経営戦略説明会（2026年5月） 質疑応答（要旨）

【キャピタルアロケーションについて】

- Q) 今回公表の投融資（未来投資・成長投資・維持更新投資）が、前回公表から約 1,000 億円増加しているのはなぜか。
- A) 物価上昇や為替の影響により、投資案件の金額は全体的に増加している。ケブラダ・ブランカ銅鉱山については、当初想定に対し生産計画に遅れが生じたことや尾鉱堆積場の対策を進めていることなどから、若干の増加を見込んでいる。
- Q) 今回公表のマネジメント・アロケーション約 1,100 億円のうち、今回決定した自己株式取得約 200 億円および取得済みの自己株式約 150 億円を差し引いた約 750 億円は、どのように活用するのか。また、足元の金属価格がこのまま続けば、手元資金のさらなる増加が見込まれるが、その資金をどのように活用するのか。
- A) 最優先は、新規プロジェクトなどの成長投資に充てたい。現時点で開示可能な案件はまだないが、海外権益獲得などの大型案件の検討を進めている。それらの進展次第では、大規模な資金需要が生じる可能性がある。一方、例えば、本日説明したスカンジウムの生産能力増強など様々な投資機会があり、対応していきたいと考えている。
- Q) 2028 年 3 月期予想のキャピタルアロケーションについて、どのような前提で作成したのか。
- A) 価格は 2027 年 3 月期予想と同水準とした。生産量も 2027 年 3 月期の見通しに一部判明している情報を加えている。

【資源事業について】

- Q) ケブラダ・ブランカ銅鉱山について、2027 年から 2028 年の収益貢献はどのように考えればよいか。
- A) 現時点では操業に大きな問題はないと認識している。現在進めている尾鉱堆積場の対策が進めば、パートナーであるテック社が公表している生産ガイダンスに沿って収益に貢献すると見込んでいる。
- Q) コテ金鉱山について、コテ鉱床に隣接するゴセリン鉱床の開発が収益を押し上げる可能性はあるか。
- A) ゴセリン鉱床ではすでに探鉱を進めており、比較的良好な結果が得られている。現時点では確かなことは言えないが、今後も探鉱を継続し、十分に魅力のある案件であれば開発を進めることになる。
- Q) ゴセリン鉱床の投資決定から収益貢献までの時間軸はどのように考えればよいか。
- A) 評価にはまだしばらく時間を要する見込みである。その後に投資判断を行い、設備増強を進める形となる。例えば、グリーンフィールドで新設するのではなく、既存設備の増強であれば、極端に長い期間は要しないと考えている。

【製錬事業について】

- Q) 銅製錬の収益性はどのように考えればよいか。
- A) 当社としては、銅製錬を単独の事業として捉えているわけではない。まず、銅製錬は、資源を確保するためにも重要な事業と位置づけている。銅製錬を行う東予工場があるからこそ、資源メジャーとも連携しながら、資源開発を一体的に進めることができる。また、例えば、他社では原料の銅精鉱中のニッケルが不純物として扱われ、コストをかけて除去しなければならないのに対し、当社ではそれを高品質なニッケルの原料として製錬できる。つまり、銅精鉱中のニッケルをニッケル原料として活用できることは、当社の大きな強みである。
- さらに、東予工場では菱刈鉱山の金鉱石を処理している。菱刈鉱山の高品位の金鉱石を自社で処理できることに

加え、金鉱石に含まれる珪石は銅製錬に欠かせない操業用資材として活用できるため、必要な原料の一部を自社で賄うことができ、資材コストの抑制につながる。こうした事業の連携も大きな強みと考える。

Q) 銅製錬におけるリサイクルについて、収益性はどの程度期待できるのか。

A) 本日説明したワイヤーハーネスなどのリサイクルはこれから事業を組み立てていく段階にあり、どの程度の収益が見込めるかはこれから検証していく。一般に、リサイクルはバージン原料よりも安く処理できると思われがちだが、実際には複雑に混ざり合ったものを分別・処理する必要があるため、コストがかかる。したがって、リサイクルがそのまま高収益につながるとは考えていない。ただし、社会的には必要な事業であると認識しており、今後も取り組みを進めていく。

【材料事業について】

Q) 材料事業の利益水準について、中計 27 で想定していたよりも上振れる期待はどの程度あるのか。

A) ファラデーローテータについては、現時点では概ね計画どおりに伸びており、従来の 2 倍程度の生産能力まで引き上げられると見込んでいる。また、現在、需要は旺盛であるとみており、今後のさらなる増産を検討していく。これが実現すれば、中計 27 の想定を上回る収益につながる可能性はある。また、TFLN や耐酸化ナノ銅粉などの新製品については、これから市場に出していく段階だが、将来的には収益に貢献してくるものと期待している。

Q) TFLN が注目されている背景は。

A) TFLN は、現在主流の SiPh（シリコンフォトニクス）に比べて、電圧が小さく、変換効率が高いため、伝送容量の拡大に伴って今後注目される可能性があるかと理解している。ただし、最終的にどういったものが主流になるかは、今後の技術開発次第であり、まだ流動的と捉えている。

【中東情勢の影響について】

Q) 中東情勢の影響について、どのようなコストやリスクを織り込んでいるのか。

A) 現時点では、エネルギー関連と資材単価の上昇を織り込んでいる。それ以外にも、当社としてはさまざまなリスクを検討し、対応を進めている。例えば、ナフサ市況が逼迫しており、溶剤関連には注意が必要と見ている。機能性材料事業では複数の溶剤を使用しており、製錬プロセスでも有機溶媒を用いて分離・精製している部分がある。もっとも、今年度の業績については、現時点では直ちに大きな影響が出るとは考えていない。

【レアアースについて】

Q) ファラデーローテータの原料として使われるレアアースは、確保できているのか。

A) 現時点では、当社の操業に直接影響するような原料調達リスクはない。ただし、現在の状況が長期化すれば、将来的には何らかの影響が生じる可能性がある。そのため、複数の調達先を確保するなど、安定化に努めている。

Q) SOFC（固体酸化燃料電池）向けの材料が伸びている背景は。

A) SOFC については、固体電解質である安定化ジルコニアにイットリウムやスカンジウムなどを添加することで、性能が向上する。特にスカンジウムを添加すると、固体電解質中での酸素イオンの移動が速まり、比較的低い温度域でも高効率で発電できるようになる。このため、データセンター向け電源など、電力需要の大きい分野で注目が高まっている。また、天然ガスを利用しやすい地域では、天然ガスを使って SOFC で発電できることから、活用の動きが広がっている。

以上